

保護者様

令和8年度 全国学力・学習状況調査 結果について

4月23日に6年生のみが実施した「令和8年度 全国学力・学習状況調査」の結果が文部科学省より提供されました。国全体としては、主体的に学習に取り組み、対話を通して学びを深める児童のほうが各教科の平均正答率が高い傾向にあることが示されました。

本校としては、この調査によって測定できるのは学力や、教育活動の一側面であることを踏まえた上で、本校の学習指導上の課題を以下のように把握分析しました。保護者の皆様にお伝えするとともに、今後も学校全体及び児童一人ひとりの学習改善と学習意欲の向上に向けて取り組んでまいります。

各区分の結果と分析、今後の取り組み

	国語（正答率％）	算数（正答率％）
本校	55	48
神奈川県	61	58
全国	60.9	56.4

【国語】

分類		区分	対象 問題数 (問)	平均正答率(%)		
				本校	神奈川県 (公立)	全国 (公立)
全体			13	55	61	60.9
学習 指導 要領 の 内容	知識及び 技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	4	56.8	65.2	66.8
		(2) 情報の扱い方に関する事項	2	53.4	53.3	52.3
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	0			
	思考力、 判断力、 表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	56.8	66.9	65.8
		B 書くこと	2	45.5	46.3	45.7
		C 読むこと	2	59.1	66.2	65.9
評価の観点		知識・技能	6	55.7	61.2	62.0
		思考・判断・表現	7	54.2	60.8	60.1
		主体的に学習に取り組む態度	0			

全国や県の平均正答率との比較の結果は上記の表の通りです。区分別に見ると、「情報の扱い方に関する事項」は53.4％と全国平均をやや上回り、複数の情報を関連付けて考える力は一定程度身に付いていることが分かりました。一方で、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」の領域では全国平均との差が見られ、特に、文章や資料の内容を正確に読み取り、自分の考えを、根拠をもって表現する力に課題が見られます。また、漢字を文の中で正しく使う問題や、文章中の情報を引用しながら自分の考えをまとめる問題では、正答率が低い傾向が見られました。この結果を受け、今後は、「読む・聞く・書く」を相互に関連付けながら学習を進め、文章や資料を比較しながら内容を整理したり、目的に応じて必要な情報を選び取ったりする活動の充実に加え、日常的な漢字および語彙の習得に取り組んでいきます。

裏面あり

【算数】

分類	区分	対象 問題数 (問)	平均正答率(%)		
			本校	神奈川 (公立)	全国 (公立)
全体		16	48	58	56.4
学習指導要領 の領域	A 数と計算	8	55.4	62.6	61.1
	B 図形	4	46.6	57.0	55.3
	C 測定	1	79.5	79.7	78.1
	C 変化と関係	3	32.6	44.2	41.1
	D データの活用	4	42.6	49.4	48.6
評価の観点	知識・技能	12	53.0	61.6	60.1
	思考・判断・表現	4	34.7	46.2	45.4
	主体的に学習に取り組む態度	0			

全国や県の平均正答率との比較の結果は上記の表の通りです。領域別に見ると、「測定」の領域では、79.5%と全国平均を上回る結果となり、時間や量などを具体的な場面で活用する力は比較的身に付いていることが分かりました。一方で、「変化と関係」や「データの活用」の領域に課題が見られ、グラフや表を基に自分なりの考えや理由を説明する力を育むことの必要性を感じます。この結果を受け、本校では計算技能の習得だけでなく、「なぜそのようになるのか」を考え、説明する学習をより充実させていきます。授業では、図や表、数直線などを活用して数量の関係を視覚的に理解できるようにするとともに、自分の考えを言葉や式で表現する機会を増やしていきます。また、日常生活の場面と結び付けた問題解決学習を通して、学んだ知識を活用する力を育成していきます。

【児童質問紙】

生活状況の設問への回答から見えた傾向として、「自分にはよいところがあると思うか」という設問に対して、肯定的な回答が80.0%であり、「先生がよいところを認めてくれる」「学校に行くのは楽しい」などの設問に対しても肯定的な回答が全国平均を上回っています。また、「地域や社会をよくするために何かしたい」に対する肯定的な回答が91.1%で、全国平均80.1%を大きく上回っています。これからも学校と地域が連携し、児童のよいところを積極的に認めて伸ばし、それらを発揮する機会をつくることで、児童の学びに向かう意欲を高めていきます。一方で、学校の授業時間以外の勉強時間や読書時間は、全国や県の平均と比べて少ないことが分かりました。家庭と連携しながら、家庭学習や読書時間の充実を図ることができるよう、よりよい生活習慣の定着に向けて取り組んでいきます。

各教科等の学習の設問の回答からは、国語においては「授業内容はよく分かる」に対する肯定的な回答は73.4%と高くなっている一方で、「勉強は得意」48.9%(全国平均60.4%)と全国平均と比べて低い傾向にあります。また、算数においても「授業内容はよく分かる」に対する肯定的な回答は66.6%と高くなっている一方で、「勉強は得意」55.5%(全国平均59.7%)と低い傾向にあります。このことから、「国語・算数の授業内容は分かるけれど、自分は得意だと思えていない」児童が少なくないと考えられます。授業内容の理解に関する指導と支援に加えて、国語・算数をはじめとした様々な学習の中で、問題を解くことができた達成感やできることが増えた喜びを積み重ねることのできる活動を取り入れていきます。

【重点研究との関連について】

今年度の結果と、本校が生活科および総合的な学習の時間を重点研究として授業改善を開始した令和4年度の結果とを比較すると、令和4年度の「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」に対する肯定的な回答が36.0%であったのに対し、令和8年度の「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」に対する肯定的な回答は91.1%と、55.1%増加しています。また、「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」に対する肯定的な回答は10.0%増加、「5年生までに受けた授業では、各教科で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」に対する肯定的な回答は17.7%増加しています。このことから、多くの人や社会・地域との関わりを通して学んだり、各教科等で身に付けた資質・能力を相互に関連付けて学習や生活に生かしたりする生活科および総合的な学習の時間が、児童の意識や問題解決能力に影響していることが分かります。これは、児童が興味・関心をもって主体的に学習し、課題を自ら設定して解決に取り組む中で、学習の楽しさと成功体験を積み重ねてきた成果だと考えられます。今後は、各教科で見えた学習指導上の課題の改善に真摯に取り組むとともに、重点研究を通しては、児童一人ひとりが思いや願いをもって友達や教師、地域と関わり合う中で、成長していく児童の姿を見られるよう教育活動に努めていきます。